

体験活動の「質」を問う

豊かな体験活動推進フォーラム



生活体験や自然体験などの直接体験が不足する現代の子どもたちにとって体験活動の機会と場の提供は極めて重要であると考え、その推進に向けて全国小学校行事研究会と国立妙高青少年自然の家は、これまでに3回の全国フォーラムを開催してきました。

4回目を迎える今年度は、文部科学省委託事業「青少年の課題に対応した体験活動推進プロジェクト」を受託し、平成21年10月24日から25日に国立妙高青少年自然の家（新潟県妙高市）を会場に開催いたしま

した。

1日目は、文部科学省初等中等教育局児童生徒課課長・磯谷桂介氏による基調講話「最新青少年教育の動向」、シンポジウム「豊かな体験活動の進め方伝授します」を実施。磯谷氏は、学校教育における体験活動の施策動向を説明し、全国の小学校に向け、長期宿泊体験活動を推進する必要性について語られました。続くシンポジウムでは、國學院大学の宮川八岐氏をコーディネーターに、宮川氏の基調提案ののち、学



校教育（石塚忠男氏・越谷市立大相模小学校）、冒険教育（河合宗寛氏・日本アウトワード・バンド協会）、高等教育（坂本昭裕氏・筑波大学）、青少年教育（小林真一氏・国立青少年教育振興機構）の各シンポジストがそれぞれの視点から豊かな体験活動推進のためのポイントを参加者に提案しました。フロアからも活発に質問が出され、終了時刻をオーバーするという一幕もみられました。

2日目には、全参加者が自然体験とコミュニケーション体験に分かれて参加する「妙高体験型ワークショップ（プログラム体験会）」と千葉県知事・森田健作氏による特別講演会「早ね早おき朝ごはんで拓く子どもたちの未来」を実施。講演の中で、森田氏は、「ご自身のエピソードを交えなが

ら規則正しい生活習慣の大切さを熱弁されました。また、子どもたちの健全な育成のために、大人の関わり方が必要であるとされました。

期間中、国立青少年教育振興機構の中部・北陸ブロック五施設（立山、能登、若狭湾、乗鞍、妙高）、全国小学校学校行事研究会をはじめとする14団体が、日頃の体験活動推進に向けた取組をブース（出店）形式で紹介し、参加者に対して積極的に情報発信・普及を行い、好評を博しました。

～平成22年度の予定から～

次年度の開催日は、平成22年11月13日から14日にかけて国立妙高青少年自然の家で開催することが決定しています。ぜひ、多数の会員の皆様のご参加をお待ちしております。

ミクロネシア 少年少女自然体験交流事業

ミクロネシアの子ども 30 名を日本に呼び、自然環境や文化、人々との交流等の体験活動を通して、日本についての理解を深めることを目的とした交流事業である。(主催 独立行政法人国立青少年教育振興機構国際課) 全 12 日間に渡る事業の内、後半の 4 日間(6 / 26 ~ 6 / 29) を妙高青少年自然の家企画事業として実施した。



1日目

ようこそ妙高へ!

東京からバスに揺られてやってきた一行には少し疲れが見えた。無理もない、自国を旅立つてから 7 日目の午前であった。そんな一行を元氣付けるべく出迎えたのは、自然の家職員一同と、地元妙高市の小学校 6 年生児童 100 名である。児童等は、事前に練習したであろう英語の挨拶や歌、手拍子などで歓迎の気持ちを精一杯表した。歌や

手拍子に感激した、ミクロネシアの子どもは、積極的に児童等の中に入り握手を交わした。自発的な交流が生まれた。

午後、職員による人数集めゲームの後、5・6 人グループに分かれてオリエンティングを実施した。子どもたちは、暑い日差しの中、地図を片手にコースに飛び出して行った。施設内に広がっているオリエンティングコースは、そのほとんどが林間であり、コナラやカラマツの林を通り抜け

たり、流れる沢を横断したりする。自然を満喫することができた。

2日目

ニホン体験

妙高プログラムの 2 日目は、日本の文化に触れてもらうため、長野県長野市にある善光寺参拝と、チビッコ忍者村の忍者体験を実施した。日本を代表する木造建築の一つを見学し、手裏剣投げやアスレチックのような修行を体験することで、大変楽しい思い出の一日となった。日本の家族と良い出会いができた。

3日目

さよならニホンの家族

2 日目の夕方から丸一日を一緒に生活した日本の家族と最後に過ごすフェアウェルパーティーが始まった。子どもたちは、互いの近況報告をしあうなどして、ひとしきり語り合った後、お世話になった日本の家族と同じテーブルに着いた。

会食の合間にミクロネシアの 3 地域子どもたちから、お礼の発表があった。マーシャル地域の子どもの民族舞踊、チューク地域の子どものスティックダンス。コスラ地域の子どもの合唱などである。それぞれ日本との交流をきっかけに熱心に練習に取り組んできたことがうかがえる出来栄であった。会場に居合わせた一般客からも盛大な拍手を贈られるなど、温かい雰囲気の中で会が進められた。パーティーの終盤には、会場の各所で日本の家族との涙の抱擁や記念撮影をする姿が見られた。たった一日という短い時間ではあったが、名残惜しさがひしひしと伝わってきた。

4日目

日本の小学生との交流

妙高高原南小学校にて、高学年児童の企画による交流活動が催された。

前半は、ミクロネシアの子どもの発表や妙高高原南小学校の創作ダンスと一緒に踊る等、全校での交流活動を展開した。後半は、書道、茶道、日本の遊びの 3 つの活動を順番に体験した。児童がホスト役としてミクロネシアの一人一人の子どもに付き添い、体験の仕方や遊びのコツなど、ジェスチャーを交えて教えていた。初めはぎこちない様子で案内をしていたが、次第に説明がスムーズに行くようになり、段々と交流が深まっていった。書道体験では、筆の運びについて寄り添うようにして指導する子ども姿。日本の遊び体験では、お手玉が上手なミクロネシアの子どもが、逆に日本の子どもに教える姿が見られた。それぞれの国の子どもたちにとって、体験を通して心を通わせていくことが、言葉の垣根を越えて互いに理解を深めていく最良の方法であった。

玄関前には、旅立つミクロネシアの子どものバスを、元気に手を振って、バスが見えなくなるまでいつまでも見送る妙高高原南小学校の子どもたちがいた。



環境教育指導者養成研修

東部ブロック

(平成21年10月20～23日実施)

本研修は独立行政法人教員研修センターが主催となり、文部科学省と独立行政法人国立青少年教育振興機構が共催となつて行つた研修会である。

研修の目的は、ESD（持続可能な開発のための教育）および学習指導要領の改訂を踏まえた環境教育を推進する上で必要な資質・能力の向上を図るとともに、各都道府県における研修の講師を育成することであり、受講者は各都道府県の教育委員会からの推薦を受けた教員67名が参加した。国立妙高青少年自然の家では昨年度に引き続き、2年連続での開催となつた。

文部科学省初等中等教育局教育課程課の村山哲哉教科調査官の他、全国で環境教育を実践している著名な方々を講師として迎えた。

1日目は村山氏による「これからの環境教育の展開方策及び研修の進め方について」講義をしていただいた。そして文部科学省からの研究指定を受けた宮城県気仙沼市の小・中・高等学校の事例報告がなされた。

2日目は「持続可能な社会を目指した環境教育」「ESDにおける環境教育」の講義の後に、フィールドワークを行った。

フィールドワークは妙高独自の自然環境を活用したESDを受講者に体験する研修である。今回のフィールドワークは7月に開催された妙高ネイチャープログラム指導者養成研修を踏まえ、「妙高火山の形成過程と我々に及ぼす二面性」というテーマを設



定した。妙高火山を中核教材として、火山起源の温泉や土壌、気象や植生、地域の文化・伝統、地域産業等を有機的に捉える内容にした。全体会の中でこれらをプレゼンテーションで学んだ後に、妙高ネイチャープログラムの「妙高火山」「ブナ林探検隊」「源流探検」を希望選択で体験した。

受講者からは「妙高火山という地域に根ざした教材を生かして環境教育を行っていることは大変勉強になった。自分の住む地域でどんな教材があるかを考える良い機会となつた。」「これまでは単なる美しい景色としてだけの見方をしていたが、その原因を理解することにより、視野を広げることができた。」などの感想が寄せられた。

3日目は、小・中・高等学校分科会に分かれ、講師によるワークショップがなされた。そして最終日は全体の総括によって、閉会した。

本研修は我が国においてトップレベルの環境教育の研修であり、妙高ネイチャープログラムが受講者から高い評価をいただいたことは、国立妙高青少年自然の家にとって大きな存在意義を示したことになった。妙高で学んだ受講者には各都道府県の環境教育のリーダーとして活躍されることを願っている。

心の冒険教育指導者養成研修

【期 日】

平成21年6月12日(金)～14日(日)

コース

平成21年6月13日(土)～14日(日) 1泊2日

コース

平成21年6月12日(金)～14日(日) 2泊3日

【参加者】

コース 25名 コース 19名

【講師】

コース 杉村 厚子

プロジェクトアドベンチャージャバントレーナー

コース 関 智子

プロジェクトアドベンチャージャバントレーナー

【趣 旨】

児童・生徒のコミュニケーション能力の向上に資する指導法について研修し、実際の教育現場で集団内の一人一人の信頼と安心を構築することのできる指導者を育成すること、妙高アドベンチャープログラムの指導者を育成することを目的とした。

本研修では、参加者のニーズに考えられるよう2つのコースを設定した。

【コース】

グループの力を活かす教育手法コースとして、1泊2日で実施した。「妙高アドベンチャープログラム」を用いた人間関係づくりの活動を生かし、青少年一人一人の安心と信頼を構築する指導方法について理解を深めることを目指して実践的な活動が展開された。

【コース】

妙高アドベンチャープログラム習得コースとして、2泊3日で実施した。「妙高アドベンチャープログラム」のプログラム指導のために必要な知識や指導技術の習得を図り、研修終了後に即実践が可能なプログラムの提供を目指して実践的な活動が展開された。

【成果】

今回の参加者のうち、初めての参加者が16名おり、心の冒険教育の普及につながった。また、妙高アドベンチャーの指導者を認定するコースの参加者のうち4名は、研修のうち自然の家の外部研修指導員として、利用団体の講師を務めた。

今回、学校関係者の方が7名ほど参加された。青少年の心の支えとなるような手法の一つとして、青少年の指導者に携わる方には、ぜひ、この事業について知っていただきたいと思う。



【事業の実際】

<コース>

	6月13日(土)	6月14日(日)
午前	【講義・演習】 心と体の準備運動	【講義・演習】 課題解決型アクティビティ
午後	【講義・演習】 集団づくりに生かすアクティビティ	【講義・演習】 ふりかえり
夜	【講義・演習】 妙高アドベンチャーの理念と概念	

<コース>

	6月12日(金)	6月13日(土)	6月14日(日)
午前		【講義・演習】 課題解決型アクティビティ	【講義・演習】 課題解決型アクティビティ
午後	【講義・演習】 心と体の準備運動	【講義・演習】 課題解決型アクティビティ	【講義・演習】 ふりかえり
夜	【講義・演習】 妙高アドベンチャーの 理念と概念	【講義・演習】 エレメントの理解	

学校長期自然体験活動指導者養成研修

小学校学習指導要領「特別活動」学校行事の(4)遠足・集団宿泊的行事では、「自然の中での集団宿泊活動など平素と異なる生活環境にあって、見聞を広め、自然の文化などに親しむとともに、人間関係などの集団生活の在り方や公衆道徳などについて望ましい体験を積むことができるような活動を行うこと」とある。集団宿泊活動については、望ましい人間関係を築く態度の形成などの教育的な意義が一層深まるとともに、高い教育効果が期待されることから、学校の実態や児童の発達段階を考慮しつつ、一定期間(例えば1週間(5日間)程度)にわたって行うことが望まれる。その際、児童相互のかわりを深め、互いのことをより深く理解し、折り合いを付けるなどして人間関係などの諸問題を解決しながら、協調して生活することの大切さが実感できるように解説されている。

炊事の特徴の技術「源流探検」を行い、自然の家のプログラムを実際に体験してもらうことにより、子どもたちの立場、指導者としての立場など、角度を変えた視点で取り組んだ。後半は、上越教育大学准教授橋本定男氏による「教育課程と体験活動の関連」の講義、小学校長期宿泊プログラムの事例発表」として、新潟県妙高市で市内の6年生を対象として実施されている妙高フレンドスクールの全体指導者として活躍されている自然学校ねぎぼうず代表大矢かおる氏が事例を紹介した。実際に活躍をされている方の話とあって、参加者たちは熱心に耳を傾けた。

その小学校が実施する1週間程度の自然体験活動において、計画・立案に対して助言を行う。活動全体の様子を把握し、全体指導者を行う。事業終了後に学校が行う評価について助言を行う。以上の内容を支援・指導するための人材を養成することを目的として実施した。本事業は、前半1泊2日、後半1泊2日に参加した方に全体指導者として、認定をした。

体験活動の指導法として「ラボラトリー方式の体験学習・コンセンサスを得る」では、話し合いの方法を学び、プログラムの企画・立案を実施した。4泊5日で、妙高青少年自然の家を舞台にどのようなプログラムができるかを、参加者たちをいくつかのグループにわけ、作成してもらった。作成したものを発表し、互いに協議し、指摘されたところを検討・修正を加えて、最終的にプログラムを完成させた。

成果は、今回の研修で35名の全体指導者の養成を行うことができた。また、本研修で知り合った方々で互いにネットワークを広げる動きもあつた。関係機関との連携を図りながら、事業の企画・運営を行った結果、有機的な連携を図れた。課題としては、小学校への全体指導者の認知度が低いため、実際の需要についてどうなるかなどの課題がある。また、スキルアップ研修の場の必要性がある。

妙高ネイチャープログラム指導者養成研修 (平成21年7月3～5日実施)

国立妙高青少年自然の家(以下、妙高自然の家)には、施設周辺の自然環境を活用した活動プログラムがある。現在、33種類の活動プログラムがあり、妙高ネイチャープログラムと呼んでいる。平成22年度の実績として32団体から妙高ネイチャープログラム外部研修指導員への指導依頼があり、1,476人の利用者に対して、のべ83人の外部研修指導員を派遣した。

妙高ネイチャープログラム外部研修指導員の資質・指導力の向上を図るために、妙高自然の家では毎年、妙高ネイチャープログラム指導者養成研修を実施している。対象は環境教育指導者を指す人、教職員、現在妙高ネイチャープログラムに登録している人である。今年度は17名が参加した。

本研修の中で、もっとも有益だったのは、上越教育大学大学院教授の藤岡達也氏による『ESD(持続発展教育)と自然の二面性を重視した地域環境教育』についての講義であった。

ESDとは、地球規模の環境破壊や、エネルギーや水などの資源保全が問題化されている現代、人類が現在の生活レベルを維持しつつ、次世代も含む全ての人々に、より質の高い生活をもたらすことができる状態での開発を目指す教育のことである。

この教育を展開する上でベースとなるのが、自然という地域特性の二面性(恩恵と災害)を理解することである。そして、自



然からの恩恵をさらに享受しつつも防災あるいは減災するためには、各方面との連携が必要であることを学んだ。

このことは、新学習指導要領に対応した妙高ネイチャープログラムのあり方を模索していた外部研修指導員にとって大きな指針となった。

従来の妙高ネイチャープログラムは自然の事物・現象を個別のものとし、その理解に重点が置かれていた。しかし、ESDを意識して妙高ネイチャープログラムを見直したところ、事前の事物・現象の有機的なつながりを見出すことができた。

妙高ネイチャープログラムは、自然観察会で行われる自然観察とは一線を画する。学習指導要領に準拠し、学習者の既有体験、既習内容、興味関心などを踏まえた上で展開される教育活動である。そのことを確認するとともに、ぶれない方針を見出すことができた。

現在、妙高ネイチャープログラム外部研修指導員は24名が登録している。妙高ネイチャープログラムに、より高い教育効果を求める団体には、外部研修指導員を紹介するので、事前打合せ時に相談していただきたい。

